

修士論文概要

地域の学習補修教室における日本語教育の役割

—支援者間の共同活動を通じて考察する—

和久仁美

本論文は以下を研究目的とした論文である。

- (1) 支援者の日々の支援活動の詳細を確認すると共に、その支援の中に「日本語」という問題がでたときにどのような対応をしているのかを明らかにした上で、支援活動の中での日本語教育の位置づけと役割を考察する。
- (2) 支援者間の協働活動について支援者自身がどのように考え、どのような可能性があると考えるか。今後学習補習教室において協働活動は、どのような発展性があるのか考察する。

また、調査方法としては、面接法を用いた。インフォーマントは以下のようにカテゴリーライズし、面接を行った。

- ①日本語教育についての知識がない者
- ②日本語教育について知識を有しているが、日本語指導を行っていない者
- ③日本語教育について知識を有していて、日本語指導を行っている者

面接は半構造化面接法で行い、そして分析はKJ法で行った。

定住外国人世帯は増加傾向にあり、それに比例し、日本語教室も増加傾向にある。日本語教室に、外国人の子どもが来て、対応せざるを得ない状況になったことで、大人と一緒に日本語を学ぶ子どもも少なくない。子ども達対象の教室も増えてきてはいる。しかし、その数は圧倒的に少なく、大人の教室以上に学年や対応科目等の制限が設けられていることが多い。また、外国につながりを持つ子どもたちを中心とした学習補習教室は未だに少なく、子ども達が、遠方から来ざるを得ない状況である。

学習補習教室はその名の通り、日本語に特化しているものではない。教室によって何を重点としているかは異なるが、滞日期間が短い子どもを除き、学校で学ぶ教科の内容を学びにきていたり、受検（受験）対策のために来たりしている。子どもの中には、教科を学んでいる際、日本語が鍵になることがある。この問題は、学習補習教室において教授形式がマンツーマン形式を取るため、支援者間の横のつながりが希薄に

なり、日本語と教科学習が別々に取り扱われがちであるがために発生しているのではないかと筆者は考える。故に、支援者間の横のつながりが希薄になりがちな問題の、背景や原因を考察し、その解決方法を提示することに依って、日本語教育と教科学習が別個に扱われがちな現状を改善する一助となり、ひいては、学習補習教室において子どもたちが、学習言語をスムーズに習得する足がかりになるのではないかと考えるに至った。

そこで、本論文では、学習補習教室における支援者間の協働活動とそこにおける日本語教育の位置づけと役割について考察を行うこととする。

筆者は、2005年10月から2006年12月現在まで、神奈川県にある日本語支援、学習支援、進学支援を子どもに行っている団体Yのボランティアスタッフとして日本語や学習内容に困難を覚えている子どもを支援してきた。

支援している団体の中で感じたことは、子どもたちが非常にのびのびと過ごしており、自分のペースで支援者と学んでいるということである。また、支援者に関しては、現職や前職の技能や、以前支援者が学んだ内容を活かした支援を行う者もいたり、自分でできる範囲の事をしたいとする者もいたりして、同一団体内であってもその支援内容や支援の範囲はそれぞれである。例えば、Yには教育施設で教壇に立っている者もいるが、ボランティア団体のため、教えることが職業ではない（もしくはなかった）者も多くいる。様々なバックグラウンドを持った支援者が、お互いの動きを見て、自分ができることを出来る範囲で行っているのが非常に印象的であり、魅力であるように筆者には思えた。そこで、本論文は、調査フィールドを神奈川県におけるYという学習補習教室に設定し、インフォーマントをYの支援者とし、支援者間の協働の可能性と協働の中での日本語教育の役割を考察した。

先行研究では、研究のフィールドとなる学習補習教室の現状や問題、神奈川県における外国につながる子どもたちの現状と学習補習教室の現状、そして、学習補習教室に来る外国につながるを持つ子どもたちの歴史と背景を追った。また、学習補習教室のベースとなっていることが多い日本語教室の現状も述べた。

また、学習補習教室はボランティア団体であり、そして支援者はボランティアであるため、ボランティアとは何であるかを提示した。

そして、本論文は支援者間の協働について調査・分析を行うため、「協働」が日本語教育において、そして他領域においてどのような定義となっているのかを述べた。そ

して、支援者同士の協働活動により生まれるグループダイナミクスも視野に入れ、ボランティアの集団・組織化について述べた。

本論文は、学習補習教室の支援者を焦点としており、周辺的な先行研究を挙げているような印象を受ける可能性がある。しかし、本論文の研究目的である学習補習教室の支援者を焦点とした論文はほとんどなく、また、フィールドを学習補習教室にし、支援者同士の「協働」について述べられた先行研究はなかった。

しかし、学習補習教室はボランティア団体であるため、限られた人的・物的資源および、資金の中でそれらを最大限に活かし、出来る事は何であるかを支援者は考えなければならない。そのため、支援者間の協働についての研究は意味があると考ええる。

確かに、ボランティア団体は、地域の特色や団体の状況に応じて、多種多様であり一般化は難しい。しかし、支援者の専門性を各々の支援者が認識し、また、どの支援者が何を出来るかを支援者間で共有し、協働していくことは有意義なのではないかと考える。

本論文においては、2005年10月から2006年12月現在にいたるまでのフィールドノートやミーティングの議事録などを元に、Yに所属する支援者を対象に面接調査を行った。

面接調査では、

①学習補習教室における支援者間の協働を支援者自身がどのように感じ、そして考えているか

②学習補習教室における日本語教育の位置づけと役割を支援者はそれぞれの立場でどのように考えているか

という二項目を中心に行った。

調査の結果、一部の支援者の間では、「協働」という意識もしくは、「協働」という言葉や概念はなくとも、通常の支援方式である「子ども一人対支援者一人」というマンツーマン方式から支援者同士がお互いの専門性を認識した上で、協力して支援をしていく方式に対して意義を見出し、肯定的に捉えていることが判明した。これは協働と同時に数人で集まることによってグループダイナミクスが生まれているとも考えられる。

それと同時に、「協働」を肯定的かつ積極的に捉えているのは、そのグループ内での中核的役割を担っている支援者が中心で、そのような意識を持っていない支援者との

間でどのような人間関係を構築し、支援を行っていくかが協働で支援していく際の鍵であると考える。

また、日本語教育の位置づけと役割については、時間がない中で行われる受検（受験）指導において、日本語教育がどのように関わりを持っていくことができるのかという問題を残している。しかし、受検（受験）期以外の子ども達については、教科学習支援の中でどのように日本語を学んでいくことが出来るかという課題に対し、日本語教育を専門とする者と教科学習を専門とする者がそれぞれの専門性を生かし、協働で子ども達を支援していくことについて、対話しながら検討していくことが、日本語教育の役割ではないかと考える。